

商品資料館便り

商品資料館収蔵資料

活用のための覚書

経営学科准教授

兒玉州平

私は、商品資料館に収蔵されている資料群の多くが、「商品」として生み出された時期（明治末期～昭和戦中期）の産業史を専門としている。博物館類似施設での勤務経験があることもあって、商品資料館に収蔵された資料群を、直接の研究対象としうるうちの一人だろうと（勝手に）思っている。本稿は、今後活用を進めるための（個人的な）覚書である。さて、商品資料館収蔵資料は膨大であり、加えて個々の資料のメタデータが決して多いわけではない。収蔵された資料は、一点一点が指定文化財級の価値を持つわけではない。良い意味で「ありふれた」資料だからである。このような場合、資料群が「曖昧模糊」とした一塊のものとなってしまう。一塊となってしまった資料群は、それを「見せる」（たとえば展示）のも、研究材料として「示す」のも難しくなり、なかなか活用したい。このために、まずは、一塊となっている資料を解きほぐすことが必要になる。この際に重要になるのが、個々の資料間に関係性を付与する作業、すなわち、大分類等の分類を超えて（さらには他機関所蔵資料も用いて）、収蔵資料間の関係性を一つの定まった視点から体系化する作業である。

それでは、実際に収蔵資料を、私の専門である産業史の視点から体系化してみよう。事例とするのは、商品資料館に数多く収蔵されるガラス製品である。一口にガラス製品といっても、板ガラスもあり、ガラス壺もあり、各種プレスガラス、中にはカットガラスと思われる資料もある。ガラス製品間の関係性、すなわち水平方向の関係性をつけていく作業も重要であり、十分可能であると思うが、今回与えられた紙幅では到底不可能なのでここには立ち入らない。本稿は、垂直方向の関係性、つまりガラスの原料方向にさかのぼって資料間の関係性を確定していく。ガラスの原料は何だろうか？基本的には珪砂とソーダ灰（炭酸ナトリウム）である。これに相当する資料は、商品資料館にあるだろうか？旧察哈爾省大布蘇湖で産出した天然ソーダ灰がある。

では、大布蘇天然ソーダ灰は、収蔵されたガラス製品とどのような関係があるだろうか？日本でソーダ灰が製造されるようになったのは、一九一〇年代末。輸入代替の達成は一九三〇年代初めのことである。この間に絞って議論を進めると、日本で主として流通していたソーダ灰は、日本製品では旭硝子製品、日本曹達工業製品があり、輸入品としてはイギリスのプラナー・モンド社製品、ケニアで産出するマガジ・ソーダ、アメリカのカリフォルニア州インヨーで産出するインヨー灰、中国天津の永利製碱製品がある。実は大布蘇天然ソーダ灰はわずかしが流通していない。

ソーダ灰は二つのグループに分けることができる。一つは天然ソーダ灰であり、塩湖の湖底などにソーダ灰が結晶化したものを採掘したもので、マガジやインヨーがそれにあたる。もう一つは人工ソーダ灰であり、アンモニア・ソーダ法により製造される。製造費の面から価格面で天然ソーダ灰が優位にあり、日本メーカーは、しばしば天然ソーダのダンピングに苦しめられた。ではなぜ、商品資料館には一般に流通していたソーダ灰ではなく、大蘇布天然曹達が収蔵されているのだろうか？

さらに、ソーダ灰の原料に遡る。ソーダ灰の原料は塩、それも日本では産出しない天日塩・岩塩である。商品資料館には山東省塩（青島塩）が収蔵されている。山東省塩は天日塩であるが、収蔵されたガラス製品と、どのような関係があるだろうか？ソーダ灰原料として山東省塩が主として用いられていたのは、第一次世界大戦中から一九二三年までと、一九二六年から一九二九年ごろであり、以降はソマリランド塩など遠海塩が使用された。なぜ山東省塩だけ収蔵しているのだろうか？

このことの答えは、どちらも日本の帝國的経済圏の外延で産出する重要物資だったからである。日本の軍事的拡張とともに青島は一時帝国の版図に組み込まれ、また大布蘇湖もまた、日露戦後に日本が「満洲」権益を拡大するとともにしばしば調査の対象となった。日本では産出しない天日塩と、安価な天然ソーダ灰の産地が、日本の帝國的経済圏の外延に産出すること、このことをアピールするために、あえて両資料を収蔵したものであろう。

本稿では、川下から川上に向かって収蔵資料をさかのぼったが、その逆ももちろん可能である。塩もソーダ灰も、その用途は極めて広範であるから、川上から川下に向かってみていけば、必ずガラスに行き着くわけではない。たとえばソーダ灰の川下には、繊維や金属精錬、セメント製造や各種工業薬品、陶磁器・珪瑯等々が位置づく（いずれも商品資料館に収蔵される）。こうして収蔵資料間の関係を垂直報告、水平方向に往復することで、収蔵資料間の関係性が明確になっていく。一塊の資料に「文脈」が登場し、体系だった分類が可能となる。「見せる」こと、「示す」ことが可能になるのである。

「文栄堂×山口大学
地方創生プロジェクト2020」
に参加して

経営学科四年

元村天音（松田ゼミ）

山口大学と文栄堂との産学連携である「文栄堂×山口大学地方創生プロジェクト2020」に参加し、十一月六日～十二月三十一日の約二ヶ月間、文栄堂山口大学前店の二階の本棚をお借りして、参加チームごとにそれぞれのコンセプトに沿った売場をつくりました。「ニューノーマル時代における、本と書店の地域貢献」という今年度のテーマをもとに、各チームがそれぞれの企画を実施しました。

コンセプトは各チーム特色があり、私たちのチームは、「ゆらりぼん」というチーム名で、癒しやゆったりとした空間を提供したいという考えのもと、「贅沢に時間を使う、レトロ空間」をコンセプトとしました。「レトロ」



については、大正や昭和のイメージで空間内を装飾し、さらに「レトロ」というアナログの世界観で、ゆったりとした時間の流れや非日常的リフレッシュを演出しています。

この度は、二ヶ月間ほど商品資料館の貴重な資料を貸してください、ありがとうございます。お借りした置時計やレコード、たばこの空箱は、空間内の本と共に棚に並べ、当時実際に使われていたものとして置くことで、より一層大正・昭和のレトロ感を再現することができました

棚の外観については、パーテーションやのれんで仕切り、空間内の写真やポスターなどで装飾しました。空間内については、ポスターなどの装飾品や本、音楽や香りなど空間内に配置するものをすべて「レトロ感」のあるもので統一しました。仕切られた空間の中だからこそできる、ランタンのあたたかい光や雰囲気のある音楽、空間内を漂う金木犀の香りなどでレトロ空間を演出し、さらに空間内の

細部にもこだわりを持っています。販売する本は、内容が大正や昭和に関係するもの、表紙がレトロを感じられるものを選書し、当時の雰囲気を感じられるポスターやロゴを自分でデザイン・作成しました。空間内にはただレトロ感のある小物や装飾品を置くのではなく、実際に当時使われていたものを空間内に置きたいという考えに至り、山口大学内の商品資料館内に保管されているものの中から時計、レコード、たばこの空き箱を選び、本とともに並べてレトロ感を演出しました。また、空間内や外観だけでなく、SNSやポスターを使用した宣伝活動、お客様との繋がりを持つことのできる文通などにも力を注いでいました。

このように細部までこだわりを持つてつくりあげた空間では、棚での本の購入数や文通の数、空間料などの反応により、お客様に楽しんでいただけたことがわかりました。



編集後記

今年度、商品資料館は竣工が、専門家の手にかかれば工二五周年を迎えるが、新そこから息をのむような謎型コロナウイルス感染拡大 解きが展開される。ぜひ皆の影響を受け、その活動を さんもその妙技を味わって自粛せざるを得なかった。 いただきたい。

そのような商品資料館 二本目は、松田ゼミの学便りだけでも発行すること 生によるレポートである。ができ、大変喜ばしく思う。 松田先生はここ数年、文栄

一本目は、二〇一八年四 堂との産学連携に熱心に取月に着任された児玉先生に り組んでおられるが、嬉しご寄稿いただいた。 児玉先 ことに今回は学生が自分生は戦間期における日本企 たちの企画に商品資料館の業の植民地進出についてご 資料を活用してくれた。そ研究されているらしい。こ の企画じたいも立派なものれはきつと戦前に蒐集され であつたため、報告をお願 た商品資料館の資料につい いた。

でも何かコメントしていた 商品資料館の収蔵資料は だけのに違いない。そのよ 学生のためにそこにいるほ うな見込み捜査にもとづく ずだが、うまく活用できて 不躰なお願ひにもかかわら いないのが現状だ。今回は ず、ご快話いただき、素晴 学生のほうから資料への新らしい原稿をお寄せくだ しいアプローチを教えても らつた気がする。

私たち素人からするとた (商品資料館企画室長・経営学科准教授 櫻庭 総)

